

令和5年度 蕪城小学校 後期学校評価結果・分析・改善策

	上段:児童 中段:保護者 下段:教員	分析					今後の分掌方針
		A+B	A	B	C	D	
1 授業	授業はわかりやすい。	96.3	70.6	25.7	2.7	1	<ul style="list-style-type: none"> 3学期以降もねらいを明確にした見方・考え方を働かせる授業づくり及び授業改善をチーム学年で図っていく。さらに、「週1回の学年研において、「後半充実型授業デザイン」のチェックを月2回(国語を中心に)実施し、達成率90%以上を目指す。 校内研究の発表や校外への研修について月2回開催、研究発表を発行し、授業改善に生かしていく。 校内研究を整理し、研究発表の成果及び学年研究の成果及び課題の明確化を図っていく。研究発表の作成に向けて前倒しの取り組み、来年度の研究の視点を明確にしていく。 自主学習について、学年ノートによる学習力向上を目指し、児童玄関前の「自学の広場」を週1回更新し、児童の良モデルを視覚的に示していく。 来年度学習力強化に向けて、1学期は66.3%、2学期は95.1%の達成率であったため、さらなる向上を目指す。そのために、学年研において、未習児童の把握や対応について引き続き、共通理解を図っていく。
	お子さんは、授業はわかりやすいと思っている。	95.2	52.8	42.4	4	0.8	
	ねらい(育みたい資質・能力)を明確にした授業を行っている。	100	60	40	0	0	
2 家庭学習	学校でも、お家でも進んで学習に取り組んでいる。	95.8	65.6	30.2	3.3	0.9	<ul style="list-style-type: none"> ○前期同様、全ての項目において、A+B評価で90%を超えているため良好だと見える。特に、児童アンケートのCD評価において、前期よりも-0.8%であったため、教職員の児童へのこまめな声かけや指導の徹底が功を奏していると考えられる。また、家庭学習向上においても、95.1%と前期で-1.2%ではあるが、児童の家庭学習の習慣化、さらには保護者の家庭学習への声かけや家庭の向上が図られた点と考える。 ▲保護者アンケートのCD評価が6.6%と前期と比較し+1.6%上昇したことから、児童の個人差が家庭の学習習慣の差になっていると考えられる。今後、明らかとなった未習児童への個別の実施と並行して、家庭との連携も図っていく必要がある。
	ご家庭で、進んで学習に取り組むよう声をかけている。	93.4	44.4	49	5.3	1.3	
	学習に主体的に取り組む、家庭学習で学んだことを生かすように指導している。	97.1	64.7	32.4	2.9	0	
3 聞く	相手の話をしっかり聞いて、こたえられている。	95.4	59.3	36.1	3.1	1.4	<ul style="list-style-type: none"> ○前期同様、全ての項目において、A+B評価で95%を超えているため、良好だと見える。特に、教職員の授業での相手意識を高める指導や話し合いの場の設定がなされていると見られる。 ▲前期と比較してA評価がアンケートで-8.7%、保護者アンケートで-2%と微減となった。さらに、児童アンケートのCD評価でも+1.5%と上昇した。指導が徹底されている一方で、児童自身ができていないと感じていないことが挙げられる。そのため、教職員ができていない児童を個別で指導していく必要がある。
	相手の話をしっかり聞くように、声をかけている。	97.4	59	38.4	2.6	0	
	相手の話をしっかりと聞いて、こたえるように指導している。	100	72.2	27.8	0	0	
4 書く話す	1年生：自分の考えを伝えている。 2年生以上：自分の考えを伝えるときに、根拠や理由を書いたり お子さんは、進んで、自分の考えを伝えるときに根拠や理由を 表現するように努めている。	94.6	60.5	34.1	4.9	0.6	<ul style="list-style-type: none"> ○前期同様、児童アンケート及び教職員アンケートで95%を超えているため、良好だと見える。さらに保護者アンケートも前期から引き続き80%を超えている。児童が、授業中に確実な理由や根拠を書いたり、伝えられている姿が増えていると見られる。今後、本校が定めた学習目標の姿になるように、さらに理由や根拠を明確に伝える、書く場面を工夫していきたい。 ▲前期と比較して、児童アンケートで+0.5%、保護者アンケートで+0.5%と微増となった。A評価が伸び、2学期は児童のCD評価に落ちていることが、児童個人差が生じていると考える。さらに、まだまだ家庭生活の中で、理由や根拠が不明確な状態があり、学校と家庭で連携を図る必要がある。
	1年生：自分の考えを伝えるように指導している。 2年生以上：自分で考えを伝えるときに、根拠や理由を書いたり 話したりするように指導している。	82.6	30.9	51.7	15.1	2.3	
	100	77.1	22.9	0	0		
5 集団生活	いじめられたり無視されたりすることなく安心して過ごしている。	95.4	80.6	14.8	2.6	2	<ul style="list-style-type: none"> ○前期比で、児童AB評価が-1.6%であったが、全体としては95%を超えており、A評価も80%を超えているため、児童は安心して過ごしていることができていると見られる。いじめに関する年間指導計画に基づきいじめに関する授業実践や学級集会、友だちアンケートによる学年の実態把握や実態に応じた指導、児童面談による確実な内容把握等、これまでに取り組んできたことについては一定の効果があったと捉えている。 ○前期比で、保護者AB評価+0.6%であった。トラブルが発生した際や保護者からの相談があった際には、即日対応を原則とし、組織的な対応や丁寧な連絡を行っていること、いじめ防止基本方針の重要部分に添って浸透を図ってきたことが児童の安心に現れていると見える。 ▲児童CD評価+1.6%であり、D評価も+1%と不安を抱えながら過ごしている割合が増えた。保護者CD評価は-0.7%と微減であったが、0ではない不安を感じている方が一定数いること、同様に、日々の些細な表情の変化や行動の変化、人間関係の変化等にも目を配り、報告・連絡・相談を徹底する中で、組織的な対応を継続することが必要である。
	お子さんは、いじめられたり無視されたりすることなく安心して 過ごしている。	96.7	74.1	22.6	2.5	0.8	
	子どもたちが、いじめられたり無視されたりすることなく安心して 過ごせるよう指導している。	100	63.2	36.8	0	0	
6 集団生活	学校は楽しい。	95	79.3	15.7	2.7	2.3	<ul style="list-style-type: none"> ○前期比で、児童AB評価-1%、A評価-0.7%であったものの、95%を下回ることなく、保護者AB評価も+0.8%であったため、高い割合を維持することができていると見える。教職員の児童に対する温かい関わりや丁寧な指導を継続していること、規範的グループカウンセラー、「あがごとカード」や「キラキラカード」を活用した児童相互での認め合い活動の充実によって、児童は授業や行事を通して達成感を得られていると考える。 ▲前期比で児童CD評価+2%であった。C評価は-0.3%であったが、D評価が+2.3%と増える結果であった。いじめ問題の項目保持、「学校は楽しい」と感じている児童・保護者が一定数いることを考えると、日々の児童の見取りももちろん、これまで以上に児童の気持ちに寄り添った丁寧な対応を継続しながら、学習や行事等で達成感を得られる取組を提案していく必要がある。また、楽しくないと感じている児童へ積極的に関わる必要がある。
	お子さんは、学校は楽しいと思っている。	95.8	68.1	27.7	3.7	0.5	
	子どもたちは、学校で楽しく過ごしている。	100	71.1	28.9	0	0	
7 挨拶	いつでもどこでも自分から、気持ちのよいあいさつをする ことができる。	93.7	59.2	34.5	5.3	1	<ul style="list-style-type: none"> ○前期比で、教員A評価+5.2%と児童のあいさつを認めた回数が増え、高まりが見られた。 ▲前期比で、児童AB評価-2.3%であり、A評価は-1.8%であった。保護者A評価も-8.5%であった。児童・保護者ともに昨年度よりも前期比でマイナスであったことから、より一層あいさつに対する取組を強化する必要がある。教員のA評価がプラスであったことから、今後も児童に対してあいさつの価値づけや意欲をもたせる継続した指導が必要である。
	お子さんは、学校や地域、家庭で自分からあいさつをしている。	83.4	32.6	50.8	15.1	1.5	
	率先発声であいさつをし、よいあいさつを認めた回数が増えたり 行っている。	100	84.2	15.8	0	0	
8 自己有用	自分や友だちのよい所を認め、思いやりのある温かい言葉を 伝えている。	95.7	63.6	32.1	3	1.3	<ul style="list-style-type: none"> ○前期比で、児童AB評価-0.3%であったものの95%を上回っている。児童A評価の割合は、前期比で低かったが、昨年年度後期比と比べると、これまでの取組に加え、児童に対する温かい声かけや自己肯定感を少しづつ高めてきていると見える。また保護者AB評価も前期比で+0.4%であり、児童に対して大人がかけられる温かい言葉や褒め言葉を認める意識の高まりが、児童の自己有用を支えていると見える。 ▲教員A評価が-2.6%であった。保護者の意識の高まりがあることを考えると、児童と関わる時間が長い教員の指導は100%でなければならない。教員に対して、どのような声かけを行うことが必要かを再周知する必要がある。
	お子さんの努力していることや頑張りを、ほめたり認めたり している。	99.4	69.3	30.1	0.5	0.1	
	児童の頑張りを、直接的・間接的に認める声かけを行っている。	97.4	76.3	21.1	2.6	0	
9 保健食育	自分の健康を考え、生活リズムを整えて、好き嫌いを克服して 給食を食べている。	95.7	70	25.7	3.1	1.1	<ul style="list-style-type: none"> ○前期比で、児童AB評価-0.3%であったものの、A評価+2%、保護者AB評価+1.1%、教員A評価+10.9%であった。児童・保護者、教員ともに食に関する意識の高まりを認められ、食育で児童に対して声かけをいただけていると見える。 ▲保護者アンケートに関しては、改善されているもの、まだまだ改善の余地があると言える。引き続き、食に関する指導について丁寧に発信し続ける必要がある。
	お子さんは、生活習慣を整え、好き嫌いを克服して食事をして いる。	82.2	34.9	47.3	14.6	3.2	
	望ましい生活習慣、及び感謝してできるだけ残さず給食を食べる ように指導している。	100	82.9	17.1	0	0	
10 人間関係作り	話し合ったり協力したりして、みんなのために動いている。	96.1	68	28.1	3.3	0.6	<ul style="list-style-type: none"> ○児童・保護者・教職員ともAB評価は95%以上となっており、肯定的にとらえている割合がかなり高い。前期と比較して、児童AB評価が-0.9%、保護者AB評価が+0.3%、教職員AB評価が+0%となっている。学校活動の充実や委員会活動、たてわり活動に取り組む必要から、協働的に学校生活を営む意識が高まっていると見える。保護者についても、お便りやHPなどの情報や児童の様子から、協力して学校生活を営んでいる様子が伝わっていることが分かる。 ▲児童CD評価については、児童CD評価が+0.9%と変わらず、増加している。児童CD評価それぞれでは、児童CD評価が+1.3%と増加しているのに対し、D評価-0.4%と減少しているため、D評価まではいかなくても評価C評価の間にいる児童がいるようだが、B評価児童へのアプローチに力を入れることで、肯定的に自分の行動も振り返られるようになり、改善していく必要がある。
	お子さんは、友達と協力して学校生活を送っている。	97.3	61.6	35.7	2.7	0	
	ぶじょこミーティングや行事を通して、子供たちが成長を実感 できるように指導している。	100	73.5	26.5	0	0	
11 体力向上	自分のためをもって、あきらめず運動している。	96.9	81.6	15.3	1.9	1.3	<ul style="list-style-type: none"> ○児童・保護者・教職員ともAB評価が90%を超えており、肯定的にとらえている割合が高い。前期と比較して、児童AB評価が-1.9%、保護者A評価+2.4%、教職員A評価が+0%となっている。10月の運動会・11月持久走記録会に向けて、あてを決定しながら継続的に取り組んできたこと評価につながっていると考えられる。 ▲児童・保護者とも数値の上では微減であるが、全体として評価を下げ方向に傾いている様子が認められる。「できた」「できない」の結果だけでなく、その取組の過程を大切にできるように、情報発信や価値づけを行っていく必要がある。
	お子さんは、体を動かすことを楽しんで思っている。	91.6	68.3	23.3	7	1.4	
	1校1プランに基づき、子供たちが体力向上できるように指導 している。	100	72.7	27.3	0	0	
12 働き方	子供によりよい教育を行うための、業務改善に意欲して取り組 んでいる。	100	60.5	39.5	0	0	<ul style="list-style-type: none"> ○前期比で、A評価は+11.5%増となり、肯定的評価100%を達成した。また、昨年年度前期の教職員の月平均の時間外勤務時間と比較したところ、9月から11月にかけて、月平均して5時間12分の削減につながった。2学期から始めた業務改善プロジェクトは教職員の時間に対する意識の変化にもつながり、非常に効果的だったと言える。 ▲多くの業務改善アイデアを十分に生かせておらず、限られた時間の中で、教職員が工夫して業務改善を行った結果である。今後、出されたアイデアをもとに、学校として改革を進めていく必要がある。